藤井懶斎の仏教批判

岡田栄照

藤井懶斎、名は臧、字は季廉、懶斎はその号、また伊蒿子と号し筑後の人、初め真辺仲庵と称し、医を以て久留米侯に仕えた。かつて治療中の一病者の死に会い、治を誤によるものとして医を廃した。以後、京都に住し、山崎闇斎に従学、洛西鳴滝村に隠棲し高理を談じ隠君子の褒高く、室鳩巣、中村惕斎、米川操軒らと交を篤くした。

関田駒吉氏の「藤井懶斎の歿年」なる一文により室永六己丑七月十二日歿享年九十有三が知られ、逆算すると元和三年の誕生となる。

辻善之助博士は『日本仏教史』近世篇二の三四四頁、四の八九頁から九二頁に於て懶斎の排仏論を紹介された。

本論稿に於ては『日本随筆大成』所収の『閑際筆記』によつて懶斎の仏教批判の一部を提出し、その特質を検討してみたい。

市井にあつて現実に見聞した僧侶の実態に対する批判、火葬、仏法の呪術、聖徳太子、聖武天皇、日蔵上人、師錬の元亨釈書、空海、明恵、鉄眼、元政、万無、天海、等に対する論難など極めて広範囲にわたつている。

浄土教が父母の孝養の道に違背するという理由で次のように述べている。

「智恩院万無上人、小林氏ノ子ニ謂テ曰、爾ヨク父母ニツカウマツルベシ。忠孝ハ阿弥陀モ亦ヨロコブ所ナリト。此言何ゾ、源空が選捨之説ニ、異ナルヤ」

万無上人についていえば『華頂山沙門万無伝』によれば延宝九年六月二十五日、七十五歳で化（ゲ）している。心阿の『浄土鎮流祖伝巻八　頂山・大谷寺・万無上人伝』によると天和元年六月二十五日七十歳で化している。延宝を天和と改元したのは九月二十九日であり、いずれにしても懶斎と万無は同時代を生きている。

「経曰、一声ニシテ滅ス二八十億劫生死ノ重罪ヲ一。如キ二此等ノ語ノ一。其弊不レ可ラ二勝ゲテ言フ一。京師ニ有リ二一人一。怒レバ則其母ヲ殴ツ。族姻皆之ヲ譴ム。曰、汝必天誅ヲ受ケント。其人曰、勿レ憂フルコト　我何ゾ天誅ヲ受ケン。我毎ニ殴ツレ母ヲ、

未四嘗不三念仏以滅二其罪一ト。仏徒動如レ斯横流。」また念仏を日日に若干万遍、助業も亦若干一般、資財を吝ずして寺塔を建て、経像幡盖を造り霊仏安廟の地を経歴しない所はないという希有の善人といわれた人が、仏に事て昼夜をすてず、どうして老母に事へる暇があるものかと云つた。果して善人といえるだらうかと嘆いている。

脱俗、高潔の清僧として超宗派的に賞讃せられていた元政上人、浄土宗の『学信和尚行状記』に「世、出世の孝、ふたつながらを全くする事、古人といへども難とする所なり。さるに今師、これをかね全ふせられしは、うらやましきことならずや、唐土の陳尊宿、我朝の元政上人などの類にも恥ざるべしと。いと有難く覚侍る……」とある。この元政上人すらも非難の対象となつた。

「元政釈氏二十四孝二、大安寺ノ栄好ヲ取。好が母ヲ養也、毎日当レ午テ飯ヲ廨院ニ受、而一人之食ヲ分四ト為。一分ハ母ニ奉、一分ハ童ニ与へ、一分ハ行丐ニ施、一分ハ身喫。其身ヲ忘テ物ヲ愛スル可ナリト。甚シイ哉好ガ母ヲ待コトノ薄ヤ。恩行丐ニ等。如二漢ノ郭巨一憂レ之、将其児ヲ埋トス。況四分ヲ乎。元政称レ之。仏徒ノ不レ知レ孝コレヲ観テ見ベシ。」

とある。懶斎と同時代の鉄眼（一六三〇—八二）は、鉄眼版「大蔵経」として有名であり、畿内の飢民救済にも尽力した高僧であるが次の理由によつて非難される。

「仏泛愛ト雖、極重悪人ヲ宥ハ、唯弥陀ヲ推今ノ浮屠ハ例ノ悪人ヲ宥ルヲ以己ガ任トス。故ニ国政ニ害有。若夫哀矜惻怛ノ直情ニ出トキハ、猶可ナリ。但己ガ法威ヲ耀シ、国政ト相抗衡セント欲。疾ザルベケンヤ、往歳摂ノ大阪ニ、僕夫ノ其主ヲ鴆殺スル有リ。此是其項ニ鋸シテ、以天下ニ徇ベシト。僕夫ガ父、僧鉄眼ニ謀。鉄眼、罪ノ軽重ヲ不レ問シテ、奇計ヲ出シ、其刑ヲ免シム。眼何人ヤ。黄蘗隠元ガ徒ニシテ、略見所有者ナリ。安彼罪人ノ不レ可レ宥コトヲ知ザラン哉。只是ワタクシニ徇テ、恩ヲ市而已。」

聖武帝の神竜乙丑九月壬寅の詔（続日本紀巻九所収）にみられる、天皇が天変地天の責任を感じて三千人を出家せしめ諸寺に於て転経し災異を消除せんとした行為は、殷宗、宋景の善事とは全く以て非なるものであり「此帝仏ニ惑コト甚矣。」ときめつけた。

続日本紀巻十に天平元年の項に所謂、長屋王の変が記録されている。

長屋王の死をめぐつて、史実と因果が結びつけられた説話が展開する。代表的なものとして、

日本霊異記中巻に「恃三己高徳一刑ニ賤形沙弥一以現得ニ悪死一縁第一」

今昔物語　巻二十「長屋親王、罸沙弥感現報語　第廿七」などがそれである。長屋王が長室皇子と記される『閑際筆記』では「左僕射長室皇子」に聖武帝が死を命じた処置を批判し

て「長室ハ是皇子ナリ。僕射ナリ。豈之ヲ殺以テ、一沙弥数滴ノ血ニ償ヤ。帝ノ昏惑言ベカラズ。且僧徒往々人ノ死ヲ救ヲ以テ務トス。盍僕射ヲ救ザル。僕射己ガ徒ヲ撃ヲ以テナリ。其私心亦甚シカラズ乎」と結論する。

長屋王は『懐風藻』に詩三篇『万葉集』に五首をのこしている文人であり儒教を尊重した。儒学の立場にあつた懶斎は長屋王の非業の死を痛切に受容していたと思われる。

宇治拾遺物語巻八の六、「猟師ほとけを射事」及び巻十三の九、「念仏僧魔往生事」が紹介されているが、

懶斎が『閑際筆記』にとりあげた理由は恐らく智恵浅き僧侶に対する軽笑であるかもしれないが、宇治拾遺の編者の意図は、人間の弱さに寛容の態度と静観の姿勢で対処することに一種の健康な笑いをもりこもうとしたのではないだろうか。

安永十年に刊行された誹風柳多留に「日蔵に面目もない延喜帝」という句でも知られている日蔵の蘇生談、三善清行の弟で道賢と称した日蔵は、ある時頓死して冥途に至り、延喜帝に謁し、その菅公に対する罪の懺悔と依頼の仰せを受けて、十二日の後、蘇生し、事の由を村上帝に奏聞して菅廟を建て、帝の跡を弔い奉つたという俗説がある。この話は、北野天神縁起の諸本、十訓抄、今昔物語、太平記、沙石集、宝物集、などにみえる。

『閑際筆記』は文面から『今昔物語』から引用していると推定される。日蔵の夢記について懶斎は次のような見解を披瀝している。

「吾曹コレヲ聞テ、今当悲怒ニ不レ勝。当時君臣奈何ゾ早日蔵ヲ誅シテ、以其口ヲ滅ズシテ、先帝ヲ千歳ノ下ニ辱メ、国悪ヲ万代ノ後ニ遺乎。……盖渠冥途ノ事ヲ仮テ、以己ガ術ヲ神ニセント欲。人ヲ欺コトノ甚シキ、何事カ過レ之。抑延喜帝ハ、敬レ己恤レ物、歴代罕儷此君ニシテ、地獄ニ在シメバ、何帝カ地獄ニ在ザラン。蔵ニ於テ死ヲ不レ容。」

『愚管抄』は「コノ北野ノ御事ハ日蔵が夢記人モチキネドモ、又ヒガゴトニハアラヌナルベシ」と断定している。

『元亨釈書』は、『閑際筆記』に最も多く引用されている仏教史書であるが、「但其事実、尽ク信ジ難者アリ……安無稽ノ言ナキコトヲ得哉……」「然ニ八耳以下三十五字、日本紀ニ不レ見。恐ハ師錬鑿空得出テ、私加レ之歟」「全国史ニ見ズ。其実記ニアラザル者明矣。」などの批判がある。

仏教者の言説に好意を抱いていなかつたことは当然であるが、大燈国師の「肩有バ不レ衣コトナシ。有レ口バ不レ食コトナキト。此言固ニ好。所レ謂天、禄ナキノ人ヲ不レ生。地、根ナキノ艸ヲ不レ生ハナキノ意」と評することもある。

念仏僧魯含の「智者傲慢ノ気ヲ生易。我法ハ智者ヲ不レ貴。常ニ己心ヲ謙遜ナラシメント欲ナリ」ということばを聞い

て、儒者の学が智を先とするから傲慢ヲ生じ易く謙遜に遠ざかる……「魯舎が言以テ空言ナラズ。」と自省する。

『閑際筆記』に主張される仏教批判を網羅することは紙面の関係上許容されぬ故に、次の批判と反省を指摘するにとどめておこう。

本邦に聖道の弘まらないのは儒門に人なきが為である。智者はあつても仁者がいないからである。仏法は元来、夷狄の一法であり、儒教の大中至正の道と比較できるものではない。法然、日蓮は、道の為に身を忘れて奮励尽力したので、その志はとげられなかつたが仏法は天下に行われた。今の儒者は互に云う、お上が儒を好まないので首をちゞめ、舌をかみ、禍をのがれようとするばかりである。

懶斎の批判の対象となつた一般的な僧侶の資質は、彼と同時代の西鶴が『本朝二十不孝』に於て「去程に、今時の出家形気程、おかしきはなし、智恵才覚にはかまはず。武士の家にては、弓馬の芸に疎く。又、病者にして、勤の成難きを進て、衣をきせ。町人は、筭用おろかに、秤目覚えず、日記付さへならざるを。迚も、商人には思ひもよらず、世を楽に、墨染になれと。親類、了簡の上にて、髪をおろさせ。……」と描写していることから類推される。

『閑際筆記』は孝道を醸成する社会風潮に即応した傾向的な随筆であり、功利的な啓蒙性で略々一貫されている。

寄稿されなかつた諸氏の発表題目（五）

生駒良遍撰「善導大意」について（明山安雄）　証空教学に関する一二の問題（上田良準）　円多羅義集と一尋集（石田瑞麿）　三心具足の念仏——法然を中心として——（丸山博正）　親鸞における信思想の成立（幸城勇猛）　田少貳考（武内孝善）　近世初期の智積院について（徳永隆宣）　阿尾羅吽欠について（大沢聖寛）　真言密教における瑜伽観行の特質（栗山秀純）　空海の神泉苑祈雨金竜出現伝承について（木場明志）　弘法大師の上表文について（静慈円）　最澄の主張とその特色（朝枝善照）　最澄・徳一論争主題の展開（田村晃祐）　妙立和尚研究序説（小寺文頴）　法華版経の異体字について（有賀要延）　日蓮宗『草山清規』について（松村寿巌）　日蓮聖人における「時」の問題（北川前肇）　日唱の身延除歴事件について（林是晋）　仏教における伝道法の一考察（皆川広義）　禅的合宿の現代的意義（白金昭文）　曹洞宗学の性格（峯岸孝哉）　仏教における禅の原型（玉城康四郎）　近世に於ける名越派の活動と庶民信仰（嶋口儀秋）　仏教社会福祉学序説(4)（西山広宣）　願人坊主の法社会史的考察（荒井貢次郎）　近代仏教形成上の問題点——特に感性的自然を中心として——（池田英俊）　仏陀と創造主（花山勝友）　自我・無我の構造（秋重義治）　熊野那智本願について——特に青岸渡寺文書を中心に——（豊島修）

（三四九頁につづく）